

## 研修報告書「写真コレクションによる展覧会づくり」

(「20世紀の写真芸術 学生がつくる大阪新美術館建設準備室・enocoのコレクション」展)

小西 伯宗

はじめに

私自身、この研修に参加したのは、大学生時に写真の専攻であり、学芸員資格を取得していた為、大学院に入学後にそのことを活かせればと考えたからである。

### 1. 展覧会作りについて

#### (1) オリエンテーション

7月頭の開講式、オリエンテーション時に自己紹介を行なった。同じ研修生となる方達のプロフィールを聞くと、やや不安になった。大学・大学院で写真を専攻しているのが私を含



め2人だということであったからだ。展覧会には5つのテーマがあり、私ともう一人の研修生の関戸さんと2人で第1章を担当することとなった。オリエンテーションの後に、軽い作業があり会話を交わした。ここで、写真技法やプリントの種類等、写真に関する知識に差があることがわかった。

#### (2) 中間発表

その後、7月末に展示可能な収蔵作品リストを元に展示作品を選択し発表する中間発表となった。発表前に講演会「大阪の写真表現史—近代写真の担い手達からの遺産—」を研修生全員で聞いた。2人で「学生が選ぶ」という点を考え、一度好きな作品をそれぞれ考えて



きてから、各作家の作品を生年か浪華写真倶楽部、丹平写真倶楽部への入会年の順に、両倶楽部がどのように歩んで行ったのかを感じてもらえる様な展示を構想し発表を行なった。そこで、講演会の講師の吉田忠司氏と大阪新美術館建設準備室の菅谷さんからの指摘があった。展示作品に作家の代表作も必要だということだった。当初2人で選んだ作品が、どちらかといえば作家名は知られているが、あまり取り上げられない作品が多かった。振り返ってみる

と、私はその様な作品を展示することを優先してしまっていたと思う。

### (3) 展示まで

その後、8月末に2人で発表時に選んでいた30点から、大阪新美術館建設準備室の菅谷さんと國井さんに、選び直した作品で適切であるか相談の上、23点に絞った。(実際の展示時は、スペース等を調整して21点になった。)

9月、チラシ用の章解説を執筆した。80～90字の制限があったので、如何にその文字数で展示内容を伝えれば良いのかに苦慮した。

10月初旬～中頃、展示用の章解説と出品リスト、解説パネルとレイアウト案を作成した。章解説は、戦前から戦後にかけての展示作品対して、全体の流れをわかりやすくまとめて表現することが大変だった。出品リストは、作品選択時の配布資料を元に作成した。解説パネルは、展示作品の制作時代における写真のキーワードとプリントの特殊技法、戦後の動向について執筆した。レイアウト案は、一番苦慮した。作品の大きさが揃っていない、制作

年代を無視することができないなどの条件下で、どのように配置すべきかとなり、等間隔を基本にしてよく似た題材の作品を配置する様に考えた。

11月中頃、私を含む研修生4人とキャプションとパネル切りの作業を行なった。何度か経験があったので、なんとか失敗せず制作することができた。



11月21日、展示作業となった。作品の取り付けの作業は美術品取扱業者のカトーレックさんが行

うこととなっていたので、研修生は主にレイアウトの指示や展示照明の照度計測、キャプションや解説パネルの貼り付けを行なった。研修生同士、各コーナーで作業を進捗に応じて手伝うこともあった。レイアウト案から変更があったが無事展示することができた



12月17日、展示撤収作業となった。諸事情の為に、作業には途中参加となってしまった。参加できた頃には、作業完了状態であった為に大変悔やまれる。

## 2. ピンホールカメラワークショップについて

### (1) 実施まで

8月初旬の中間発表時に会期中イベントの企画発表があった。研修生それぞれが発表し選ぶ形となった。研修生のそれぞれの発表で、イベント内容が二つに分かれた。講師を招いて講演会を行う形か、写真を撮影する等のワークショップを行う形かとなり、投票で採用することとなり、そこで私が企画したピンホールカメラワークショップを採用していただいた。

なぜこの企画を考えたのかというと、私自身何度か写真展に出展したことがある中で、写真展という空間に小学生や中学生の子達が来場するところを見ることができなかったからである。何が写るかわからないピンホールカメラを自ら制作し、それをを用いて撮影することによって、まず写真自体に興味を持ってもらう。その作品が展示されることによって、写真を見ることにつながっていければと考えたからだ。

案が通ったことで嬉しさがあったが、その反面課題が見えた。まず、予算の都合上で研修生が講師となって行うこととなった。しかし、大半の研修生が暗室での作業を行なったことが無かった。加えて暗室用品をどの様に調達するのかとなった。そこで講師を依頼する予定であった、私の指導教員である吉川直哉先生に研修生への事前レクチャーと暗室用品のレンタルを依頼した。快諾だった為にその課題は解消された。事前レクチャーを行う前に、研



修生の担当日時割り振り、使用する印画紙や薬品等の選定、enocoの高橋さん制作による募集チラシのチェック等があった。

11月15日、ワークショップ事前レクチャーが行われた。ここで吉川先生から「子供相手に如何に満足してもらえるかが重要」と発言があり、終了後に研修生で如何に当日行動するのか相談しあった。3回実施予定のタイムテーブルと役割分担を決め、スマートフォンを用いた露出計アプリケーションの導入など、1週間後の本番に備えた。

### (2) 実施

1回目は、最初の司会と暗室作業を担当した。8人の子供達を保護者同伴とはいえ、研修生3人で対応することは大変であった。作業を一通り覚えるとはしゃぐ様になってしまう、暗室に入る前に撮影済み状態の箱を開けてしまうといった事前に予想できたことと、暗室作業の順番を気にしてしまうことや、スイッチ付きコードのスイッチを消した為に暗室照明を消されるといった予想できなかったことが起こってしまった。一人一人に目を配る様

にはしていたが、離れてしまった時に何かが起こってしまう形であった。翌日の2回目の担当メンバーには、反省会の終了後にこれらの情報を共有した。



翌日の2回目は、増員スタッフの1人として参加した。参加対象をこの回だけ小学生～大人としており、参加者11人に対してスタッフ5人で行うこと、箱の固定用ゴム等の補充をしていた為、前日よりはきちんと対応できるであろうと考えていた。

しかし、早々に問題が起きた。天候不良である。小雨降る中、露光に10分程かかってしまう方が出てきてしまい、露光が完了した順に現像作業等を行ってもらうことになった。それ故に当初の役割分担とスケジュールが狂ってしまい、最後の方では私は暗室担当として活動していた。その

日の反省会では、enocoの高岡さんからスタッフの手伝い過ぎを指摘された。1回目のこともあり、失敗させない様にと我々スタッフ側がカメラの制作に手を加えていたことがあった。手伝うことは良いことだったが、やり過ぎると我々が作ったカメラとなってしまう、ワークショップの意味に関わってくる。手伝うことへの限度を見極めなければならなかった。



2週間後の3回目は、2回目と同じ増員スタッフの1人として参加した。参加者10人。2回分の情報共有もあつてか、前回、前々回に比べて大きな問題が起きずに進めることができた。しかし、途中曇天になってしまったことで露出がうまくいかなかった子がいた。どうしても天候には勝てないところがあった。



### (3) 実施後

ワークショップを企画し、3回とも参加した私から見えたところは、第一に、楽しんで参加してもらえるかどうか。参加して良かったとなると、我々側もやりがいがあったとなる。第二に、最善策を取れるかどうか。天候は読める時と読めない時が出てきてしまう。撮影と現像を複数回行える様にするといった対策を取る等、状況に対してうまく対処できなければならなかった。第三に、情報の共有ができるのかどうか。2回分の情報があることによつて、3回目は大きな問題は起きずに行えた。

ワークショップの反省点と改善点は枚挙にいとまがない。それぞれ一つずつ挙げるならば、反省点は、印画紙ネガをスキャニングの後、反転し展示用のプリントを製作展示することを enoco の方に任せてしまったことだ。本来なら研修生側が行うべきところを、ご厚意で行っていただいていた。ここは、大いに反省しなければならない。改善点は、ピンホールカメラに最適な箱をどの様にするべきかだ。参加者持参の箱になるので、バラツキがあり、撮影結果に直に響いてくる。例を挙げると、箱の材質が薄く光を通してしまつて使用できないことや反対に材質が厚く加工に時間を取らざる得なくなったことがあった。



enoco と大阪新美術館建設準備室で箱の予備を用意してもらっていた為に、交換が行えた。それによりワークショップ時に箱による大きなトラブルはなかった。もう一度考えると、百貨店の箱等の規格で決まっている箱を指定して購入してもらおうか、こちら側が用意をすることもできたと考えられる。

終わりに、参加者アンケート（子供用・大人用）をワークショップ最終日に見せてもらうことができた。各回とも良かったという言葉が並んでいたのも、やって良かったなという気持ちでいっぱいになった。

### 3. 研修を通じての振り返り

この研修を通じてできたことは、美術館や博物館事業のほんの一部であった。その中でも、予算面に関してはよく考えさせられた。限られた中でイベント開催等、如何に良い展示会を行うのかということは、学校の授業等では経験できないことであった。

そして、学芸員の方と他の研修生のおかげで、写真の見方の違いを経験できたことだ。私自身、写真を専攻している為に写真の見方が一定し固定してきていたと思う。そこに変化を持たせられたことは、良い経験となった。

最後に、大阪新美術館準備室の菅谷さん、國井さん。大阪府立江之子島文化芸術創造センター（enoco）の高岡さん、高橋さん。大阪府の中塚さん。その他関係の皆様、本当に良い経験ができました。ありがとうございました。